バワの建築思想における ‘life’ の意味

ジェフリー・バワ研究 その1

AN INQUIRY INTO THE MEANINGS OF ‘LIFE’ IN BAWA’S ARCHITECTURAL THOUGHT

A study on Geoffrey Bawa (I)

高取 愛子*, 朽木 順綱**, 高松 伸***

Aiko TAKATORI, Yoshitsuna KITSUKI and Shin TAKAMATSU

This paper is one of the comprehensive researches to explicate Geoffrey Bawa’s architectural thought and works. The aim of this paper is to focus on the aspect of his thought through the inquiry into his fundamental concept of ‘life’ revealed in his principal statements. The analysis consists of three chapters as follows: Chapter 2 describes his great classical rules, such as ‘need’, ‘ambience’ and ‘material’. Chapter 3 explores the conception of ‘climate’ and ‘rationality’ related to ‘life’ through the lesson from the ‘past’. Chapter 4 explicates Architects’ realm where a building can reach in a point to give it ‘life’, that is, the realization of Architecture.

Keywords : *Geoffrey Bawa, Sri Lanka, life, climate, experience, enjoyment(pleasure)*

ジェフリー・バワ, スリランカ, 生活/生命, 風土, 経験, 喜び

1. はじめに

1-1. 研究の背景

本稿は、ジェフリー・バワ（1919-2003）の思想と作品についての包括的な解明を試みる研究の一部をなすものである。とりわけ本稿では、かれの思想的側面に主眼を置き、その構造の一端を読み解くことを通して、作品分析への端緒を拓くことを試みる。

バワはスリランカ^{注1)}で最も多作な建築家であり、その思想と作品は、アジア地域における後続の建築家らに大きな影響を与えたとされている^{注2)}。かれは、自国の特異な歴史的土壌^{注3)}と、英国での留学生活^{注4)}やグランドツアー^{注5)}を通して得た西洋の視点とを調和することで、「熱帯モダニズム」と呼ばれる一つの建築潮流の先駆者となったとされる。即ち、住宅、ホテル、大学施設、国会議事堂など、多岐に亘るバワの建築作品の大半は、アジアという固有の文化圏に呼応するものであり、とりわけ熱帯という過酷な自然環境や、地域固有の歴史的な文脈に立脚した、新しい建築のプロトタイプ^{注6)}の創出に成功したと評されている^{注6)}のである。こうした評価にも見られるように、自国の文化を重んじる姿勢、地域の自然環境がもたらす素材表現の探究、当時のヨーロッパにおけるモダニズムが目指した国際性を見据えた^{注7)}視野の広がり、という際立った特徴を論拠に、バワを、いわゆるモダニズムとリージョナリズムという対立図式の調停者として位置づけようとするのが、これまでの論評の主要な方向性であった^{注8)}。このような評価を可能にしたバワの立場を特

異づける根拠として、先述したかれの個人的事実だけでなく、かれが生きた次のような時代背景が指摘されている。即ちそれは、バワの活動の初期が、スリランカの4世紀にわたる植民地支配からの独立期^{注9)}と重なること、また、かれの最盛期が、20世紀後半における近代建築運動の最終期^{注10)}と並行すること、である。確かに、こうした歴史的事実は、近代建築史におけるバワの立場を、極めて独自の位置付けのもとに理解する手掛かりとして認めることができる。何故なら、バワ自らの出自^{注11)}や経歴に基づくアジアとヨーロッパとの文化的重合は、スリランカにおけるアジアとヨーロッパとの地理的重合のみならず、いわゆるモダニズムからポストモダニズムへの端境期という歴史的重合にも接続し得るからである。

しかし一方で、このことを異なる角度から捉え直すと、こうした様々な対立構造の図式が、バワにとって無縁の先入見であったからこそ、これまでの論評に見られるような調停者としての位置づけが可能になったのではないかと考えられる。それ故、バワの独自性とは、もはや既成の主義や枠組みの中で捉えるのみでは十分とは言えず、むしろ個別の歴史や地域という制約を超えた、かれ自身のより内的な思索、具体的に言えば、上述のように重合する状況的な事実をバワ自身がいかに関容していたのか、という視点から再評価することが重要だと思われる。ここに本稿の立場を見定めたい。

なお、バワの作品と生涯^{注12)}については、D.ロブソン^{注13)}によるバワの評伝“Geoffrey Bawa the Complete Works”（2002）（[CW]と略記）

* 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 助教

** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 助教・博士(工学)

*** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授・博士(工学)

Research Assoc., Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.

Research Assoc., Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

に詳しい。本書に対するバワ自身の関与の高さから、本稿では、これをかれの思想が十分に反映されたものとして位置づけ、主たる参考資料の一つとする。また、バワに関わる研究資料の代表的なものに、K.フランプトン^{注14)}やW.J.R.カーティスによる論評がある。とりわけ、フランプトンによる主著『現代建築史』(1985)の中で「批判的地域主義」と名付けられる現象に連なる建築家として、ロブソンがバワを位置づける論評^{注15)}が着目される。その中でロブソンは、フランプトンの言う「単なる前衛主義的芸術運動というより、むしろ批判的姿勢としての意味が込められた主義」^{注16)}なる側面を、バワが具現化していると述べる。後にフランプトン自身もまた、アジア圏の現代建築を通覧した概説書“*Asian Architects 2*”(2001)^{注17)}の序文においてバワの名を記し、「伝統を重んじる紳士的な建築家」であることの現代的意義に言及していることは、重要視すべき事柄である。しかしこれらの論評は、バワ自身やかれに相関する建築運動の中に今後の発展可能性を認めながらも、概括的な論述という性質上、その思想や作品への個別的かつ具体的な精査には至っていない。それ故本稿では、かれの制作に関わる思索の軌跡を辿り直すことによって、かれの建築思想が有する可能性を問いたい。

1-2. 考察の方法

本稿における考察の方法は、主にバワの遺した制作・実践に関わる言説を読み解くことによって諸概念を抽出し、それらの相互関係を再構成することにある。分析は、バワの主要な次の論考を一次資料とし、また、個別の作品解説、および断片集を逐次参照する。

論考Ⅰ ‘A WAY OF BUILDING’, 1968. ([WB]と略記)

論考Ⅱ ‘Statement by the Architect’, 1986. ([SA]と略記)

考察にあたり、まず、バワの言葉が内包する意味と特異性について概観する。論考Ⅰ、Ⅱはバワ自身の記述による数少ない論考の一つである。論考Ⅰはスリランカ国内誌‘*Times of Ceylon Annual*’^{注18)}において発表され、ロブソンが上述の評伝[CW]の中で述べるように「バワがデザイン哲学を表明した殆ど初めての論考」^{注19)}と位置付けられる。翌年この論考が、異なる表題‘*Ceylon: A philosophy for building*’([PB]と略記)のもとで加筆訂正され、英国の建築誌“*Architects' Journal*”に再録されることによって、バワはスリランカのみならず国際的な関心を集めることになったと言えよう。また、論考Ⅱは、1986年に出版された初の作品集“*Geoffrey Bawa*”における巻頭言であり、論考Ⅰを承けつつも内容が再構成され、結部が新たに増補されたものである。上記のことから、これらの論考に示されたバワの問いは、表題や構成を变容させつつも約20年の隔たりを越えて継続されていたことが解る。こうしたバワ自身による推敲の軌跡には、建築を言葉によって問い続ける一貫した反省的姿勢を読み取ることができ、さらに制作活動の動機を一つの体系のもとに包括していこうとするバワの思索の深化を予見することもできる。

この他にも、上述の論考を含むバワの言説自体が着目されるべき理由として、次の2つの事実を挙げることができる。まず、バワは論考Ⅱから4年後の1990年に、単著による最後の論考^{注20)}を残しているが、以降は後継者や批評家らとの対談を通して自らの思索を表明している。即ち、バワ本人による自律的な論究は、概ね論考Ⅱを境になされていないという事実である。次に、バワ本人が論考Ⅰの

冒頭に「建築について言葉で表現することには常に困難がつきまとい、とりわけ自分自身の建築について説明することは難しい」と打ち明け、既に晩年の沈黙期への移行を予言するように、論理的な「説明」の限界に言及していたという事実である。これらの事実は、バワの言説が有する特異性を以下の点で際立たせるものであると言える。一つは、かれが、論理的な「説明」によって語り得るものと、語り得ないものとを区別した結果、自覚的に沈黙期へと移行し、その後は専ら作品制作に徹したと考えられることである。このことは、かれの言説の重要性を減じるものというより、むしろ、先述した論考への徹底的な推敲に見られるような、言葉の可能性への一貫した反省的姿勢を裏付ける証左として解すべきであろう。そして、こうした論理的な「説明」とは別の次元での含意の可能性こそが、バワの言説が有する以下のさらなる特異性にも相関すると言える。

それは、一つの文脈の中に‘however’等の逆説的な表現を多用するバワの論述の展開の仕方にある。そこには、自らの思索の道程を意図的な内的批判によって転倒させ、あらゆる既成の判断基準を留保するという、バワ自身の思索の方法を窺うことができる。この事態は、ロブソンが論考Ⅱを「バワ自身による相当曖昧な(fairly equivocal)意思表明」^{注21)}と評していることにも合致する。ロブソンが言う「曖昧さ」は、一見するとバワの論点が無限定に広がり、かつ幅輻しているという事実に起因すると考えられる。しかし一方で、「法学を専攻し法律に従事した経験はかれの論理的な思考力を養っただろうし、ロンドンでのAA時代は現代建築に関するディベート力を育んだ」という異なる箇所^{注22)}でのロブソンの指摘を考慮すれば、その「曖昧さ」とは不明瞭なものとしてではなく、むしろ、バワが自らの立場を認め、その重層的な思想を意識的に表明した結果として理解するのが妥当であろう。それ故「脱構築的」^{注23)}と言われるかれの作品への評価は、「曖昧さ」や「矛盾」をも肯定的に引き受けるような、徹底した自身への批判的遡行という点で、上述したかれの思索の在り方にも通じると言える。

こうした特異性に鑑みれば、かれの言葉には、論理的な「説明」として表層的に理解するだけでは十全ではない、さらなる精査の余地が残されていると言える。それ故本稿は、かれの言説に見られる「曖昧さ」の根拠を究明することや、沈黙期への移行の真意に接近することを通して、バワの建築的思想の在り方を問うものである。換言すれば、バワが言葉によって表明し得た帰結としての言説を、とりわけ沈黙期における作品が制作される淵源としての思想と捉え、本稿を作品分析に向けた基礎的研究と位置付けたい。

1-3. 本稿の目的と構成

バワは論考Ⅰに併録する形で、代表作の一つとされる作品「エナ・デ・シルバ邸(コロンボ, 1962)」(図1)^{注24)}を、図版と解説文に

図1 エナ・デ・シルバ邸
左：リビングから中庭への眺望，右：1階平面図 [CW-75,79]

よって発表した。この作品は、後にロブソンによって「パワの作品史上、最も説得力があり、かつ美しさを秘めた作品の一つ」^{注25)}と評される住宅である。パワは同文中に、この作品が実現される過程において、「素晴らしい喜びを得た」[WB-5]ことを特筆し、その理由を次のように語る。

何故ならそれらの過程は、4人の人々（施主：訳註）と分かちあった試みであったからである。それらの人々とは、主としてその中に住む (live)人々であり、また、翻って (in turn)、そこ（この建物：訳注）に生命 (life)を吹き込む人々である。[WB-5]

この言には、かれが建築家として得たという「喜び」の根拠が示されていると考えられる。パワは公私に渡り感情を吐露することが稀であったとされる^{注26)}ことから、このことは一作品という個別の問題を超え、建築思想全体に通底する概念の表れとして捉えることもできよう。とりわけ注目されるのは、様々な相のもとに語られる‘life’なる語である。同解説文にはこの引用部に見られる「生命、生活 (life)」の他にも、「住む (live)」や「生活可能な (livable)」等、‘life’の派生語が多用されている。これらは区別されつつ反復されることによって、人間（住まい手や建築家）と建築との関わり合いが様々な相のもとに示されていると考えられる。その一つとして、上の引用部では、両者は「住み、住まれる」関係として位置づけられ、居住に関する相において見出されている。次に「翻って」、それらは「生命」を「与え、与えられる」関係へと変転し、建物の誕生に関わる相において見出されている。このような諸相のもとで発語される‘life’は、パワによる以降の論考にも頻出することから、かれの鍵概念であると予測できる。よって本稿ではこの言を手掛かりに、かれの思想を構成する諸概念についての考察を行う。この主題に基づき、本稿の目的を次のような問いの遂行として定めた。即ち、パワにとって‘life’と建築との関わり合いは、いかなる思想の構造のもとに把握されていたのか。加えて、かれにとって建築の制作は、いかなる‘life’をいかに実現することであったのか、である。

本稿の考察は、論考Ⅰのテキストの構成に従って進めるものとする。同論考は3つの節から構成され、それぞれの節において、先に言及した‘life’の諸相との相関が示されていると考えられる。以下第2～第4の各章において、論考Ⅰの各節に示唆されるパワの基本概念を‘life’の視点から解説する。予め論考Ⅰの各節の要旨を纏めると、以下の通りである。先ず冒頭では、「建物」に関わるいくつかの「法則 (rule)」が、ある構造を伴って提示される。次いで、自らの探究に基づく、「過去 (past)」からの教示や、「風土 (climate)」に寄り添ったデザインの必要性が説かれる。そして最終的に、「建築家」として制作に必要な「未知なるファクター」の発動が示される。以上の考察の後、結では第2～第4章の考察から得られた基本概念の相互関係を再構成し、これによりパワの建築思想の解明を試みる。

2. 「建築」を実現するための3つの「法則」

パワは論考Ⅰの冒頭において次のように述べる。この言には「法則」についての、かれの基本的態度が示されていると言えよう。

有史以来説かれてきた教義 (dogma) や理論 (theory) に、新たな法則 (rule)

を確立することは難しい。その上、意義ある優れた建築 (satisfactory good architecture)へと導いてくれる、知性に富んだ道標など存在しないことは言うまでもない。

「新たな法則」を「確立する」ことの困難さや、進むべき「道標」が「存在しない」ことを強調する一方、パワはこの引用の後に「新しいものではなく古くから存在し、説得力があり明白であるにもかかわらず、見過ごされがちな法則」と述べ、その存在のみならず重要性をも認めた「法則」に言及する。即ち、「法則」とは、新たに「確立」されるというより、既に在るものの中に見出されるものとして示されている。そして、パワがその「法則」への言及を通して実現を目指すものこそ、「建物」とは異なる資質を付与されたものとして位置付けられる「意義ある優れた建築」である。以下の各節において、かれが「第1」「第2」と順を追って提示した一対の「不可侵の法則」と、その後に加えられた「もう一つの法則」を詳述する。

2-1. 「第1の法則」

まず、「何にもまして重要」とされる「第1の法則」について、その全文を示せば以下の通りである。

建物 (building) には、それが誕生する (birth)に至った要求 (needs)があり、何にもまして重要な第1の法則は、最低限、その建物が生み出される要求を完全に満たすことである。

かれが「最低限、完全に満たす」べきであるとする「要求」とは、いかなる次元での必要条件であろうか。ここで注目されるのは、「第1の法則」によって「誕生する」のが、「建物」と名指されていることである。さらに、この引用部の直後に重ねて、かれは「優れた建築とは、人間的な目的 (human purpose)に決して抗うことのない建物である」とも続けている。「建築」にとって不可欠な資質が、「建物」の語を伴いながら示されていること、また上の引用で「建物」の必要条件とされる「要求」が、「建築」にあっては「人間的な目的」と換言されていることは、見過ごすべきではない。即ち、意図的と見られる「建物」と「建築」との区別のもとでこの言を捉え直せば、そこには、いわば「建物」に「人間的な」条件が重ね合わされた時「建築」は実現し得る、と述べられていることが解る。このことから翻って上の引用を改めて解釈すれば、「第1の法則」で「完全に満たす」べきであるとされるのは、いわば「建築」や「人間的な目的」の前提たる「建物」の物理的な「要求」であると理解することが可能である。このことは次の言にも明示されていよう。

必要を満たし (serve) たり、庇護 (shelter) したりする対象としての生活 (life) が何であれ、それがその中で十分に (fully) 生きられ (lived) なければ、建物は建築として達成し得ない。そして生活が十分に生きられるとは、心と身体双方の充足を意味する。

「必要を満たす」「庇護する」とは、既に見た「第1の法則」における物理的な「要求」が、「最低限」「満たされる」事態であると理解できる。その上で、上述した「人間的な目的」と同義であるとも言うべき「生活」が「十分に生きられる」ことなしには、「建物」は「建築」として「達成し得ない」と述べられている。ここで、こうした

「建物」と「建築」の峻別に伴って使い分けられる‘life’の語義に注目しよう。「生活」が「生きられる」という意図的な同語反復を伴いつつ強調される事柄こそ、いわば物的、事実的な「生活」が、人間による自覚的な意味の深まりを伴って、いきいきと「生きられる」事態に他ならないであろう。この「生活」の事態を、かれが「建築」にとって不可欠な資質と位置付ける「人間的な目的」であると解すならば、ここで見た事実的な「生活」と、「十分に生きられた」とされる「生活」との位相の差異が、そのまま「建物」と「建築」との差異に符合すると指摘できる。また「人間的な目的」としての「生活」が十分に生きられる」こととは、「心と身体双方の充足」を意味すると述べられるように、「生活」の内実が身体、精神の両側面で捉えられていることも、この引用部の解釈において見逃されてはならないであろう。

2-2. 「第2の法則」

では、「生活」が十分に「生きられる」事態とは、いかにして実現され得るのであろうか。前節で見た「建築」にとって不可欠な資質とされる「人間的な目的」について、バワは次のように述べる。

…（前略）…それ（人間的な目的：訳注）は、時代や国を違えれば広く変化することは言うまでもない。個別の文明は、独自の生活の哲学（philosophies）や方式（ways）を有しており、それらが背景となって、ふるまい（behavior）や、希望（hope）や、思想（thought）や、努力（endeavour）が推進されている。よりよく建築するためには、偽りのない顧慮とともに、これらを維持しなければならない。

この言においては、「ふるまい」や「希望」や「思想」や「努力」が、個々の人間による「人間的な目的」の様々なありようとして言い換えられているのであるが、その「背景」として、やはり‘life’に相關する概念、即ち「生活の哲学や方式」が提示されているのである。これらを、個別の「生活」を包括する統合概念、いわば集合的な意味での「生活」として理解するならば、それらが「背景」となることとは、各々の「文明」を規定する一つの固有性や、全体性がもたらされることであると捉える事が可能であろう。この観点に鑑みると、「よりよく建築する」とは、個別の「生活」を、「生活の哲学や方式」という全体性のもとに、「偽りのない顧慮」を伴って「維持」する行為であり、翻って、それが帰属する「文明」をより豊かにする行為であると解釈することができる。このような視座に基づく「文明」への眼差しが、先にあげた「第1の法則」と対をなす「第2の法則」、つまり集合的な「生活」への関心をもたらすことになったと考えることができる。何故なら、「第2の法則」とされる次の引用部が、こうした「文明」への言及の後に述べられているからである。

おそらくこのこと（スリランカが直面した歴史的転機：訳注）から、第2の根本的な法則が導かれる。即ち、セイロンに於いて、建物とは、セイロンのこの環境に寄り添い、同調するものでなくてはならない。

引用部の前後の文脈に沿って解釈すれば、ここで述べられる「環境」なる語が包含する意味の広がりの一つとして、直ちに、先の引用に見た「文明」を挙げることができるであろう。このことに加えて、次の言には、さらなる意味が示されている。

この事態（スリランカが新国家誕生を契機として、独自のアイデンティティーを探究する必要性に直面した事実：訳注）は、建築においては、自国を——即ち、雨や太陽に称えられた荒々しい自然、広大な空、肥沃な土壌を——十分に直視することを意味する。

バワが「十分な直視」の結果見出した「環境」とは、上述の「文明」に加え、スリランカ固有の「自然」をも含意していると、ここでは解釈できるのである^{注27}。なお、この「第2の法則」における「セイロン」とは、あくまでバワの母国という含みを伴った固有名詞である点に留意したい。それは、バワの言う「セイロン」を、より広義のもとで一般化し、各々の建築家の依拠する「文明」「自然」と読み替えることも可能であるからである。以上の考察より、「第2」の基本的な「法則」とは、個々の建築が従うべき「第1の法則」に根拠を与える土壌であると捉えることができ、「第1」と「第2」の「法則」には、図と地のような相補的な構造を見出せるのである。

2-3. 「もう一つの法則」

「第1」「第2」の「法則」の後に、「もう一つの」として端的に加えられた「法則」をそのまま引用すれば、以下の通りである。

前出の「法則」は、既に途方もなく不可侵のように思われる。しかしながら、ここには、もう一つの技術的な「法則」が存在する。即ち、建てる行為に使用する素材については、それがどんな建物であれ、十分な知識と正しい使い方が必要である。

ここでは、前節で見た「第1」「第2」の「法則」が「不可侵」であるとされ、それらが有する一つの完結性が示唆されている。このことは、先述した相補的な構造に由来するものと考えられる。一方で、「しかしながら」と逆説的に続けられるように、上の引用ではさらに「もう一つの法則」が、前出の2つの「法則」とは異なる位相において提示されている。「十分な知識」と「正しい使い方」と述べられるように、「素材」への敬意ともとれる配慮が示された「もう一つの法則」が、「技術的な」観点から言及されているのである。従って、図と地の構造のもとに解釈した「第1」「第2」の「法則」を建築家が依って立つべき一対の視座として理解するならば、「もう一つの法則」とは、「建てる行為」、つまり「建物」を具体的な構造物として誕生させるための実践的な方法として捉える事ができよう。

3. 3つの「法則」の源泉としての「過去」 ——「風土」と「合理」の具現として

第2章において考察した3つの「法則」が、その冒頭で指摘したように「新たな」ものではなく、「古くから存在している」と述べられていたことにも裏付けられるように、バワはモダニズムの潮流に身を置きながらも、過去の事例へと絶えず眼を向け、それらを重んじていたことが解る。その一方で、「過去は教訓を与えてくれるもの」の、現時点で何をなすべきかという全き答えは与えてはくれない」とも言い、過去に対してある限界をも見出している。では、バワは「過去」のいかなる事柄に意義を見出し、「過去」にいかにか倣うことによって、自らが取り組む制作へとその意義を反映させていたのだろうか。本章においては、これらの問いを通して、「過去」との相關において示される「風土」と「合理性」の概念について詳察する。

3-1. 「風土」——「生活」の背景として

バワの「過去」への態度は、次のように示されている。

私は、個人的な探求に際して、あらゆる過去に眼をむけた。前例としての正解からは手がかりを、過ちからは示唆を求めるために。…（中略）…私にとって過去になされた過ちとは、私が先に示した3つの「法則」を無視したことによると思われる。

「過ち」とは「3つの法則を無視した」ことに基づくと述べられることから、この言は逆説的に、前章での3つの「法則」が、過去の「正解」を源泉として見出されていたことを示唆していると言える。ところでかれが「過去」と言うとき、それはスリランカという特有の地域における全ての「過去」の事例^{注28)}、具体的に示せば「アヌラダブラの遺跡^{注29)}」から、コロンボに竣工したばかりの直近の建物」というあらゆる時代区分を超えた全ての事例を含んでいると述べる。そして、それらの事例は、「美やシンプリシティを極める頂点から、深いうぬぼれの奈落までに及ぶ全範囲の努力」と言うように、バワはそれらに、様々な既成の評価から独立した、自らの指標を確立するための根拠たる意義を見出していたことが解る。

しかしそのような「過去」に、バワはいかに倣うのであろうか。「今に残る過去の事例の、より素晴らしい事例に注目すれば、それらは、セイロンでの生活と真摯に向き合ったものであることが見出される」との言に拠れば、そこには、「生活」との相関なしに「より素晴らしい事例」、つまり「正解」とはなり得ないことが示されている。ここで、「生活」について記述された次の言が着目される。

今、我々がデザインしなければならない対象は、困難な経済状況という枠組みの中での変わり果てた社会生活である。よりスピーディーな生活、それは時としてより自由な生活、即ち新しい慣習や、絶え間なく変容する要求という指示を受け入れるさらに寛容な信条である。

ここでは「今」の「社会生活」とは、「過去」から「変わり果てた」ものであり、「絶え間なく変容する要求を受け入れる」「さらに寛容な」ものであると述べられている。このことから、全ての「過去」への探求によって見出される「生活」とは、変わることなく継承される普遍的な「生活」ではなく、個別の時代へと適応した各々の「生活」として見定められていることが解る。つまり、「過去」の事例を当時の「生活」から切り離して倣うことは出来ないものであり、それ故、本章冒頭で指摘したように、事例としての「過去」それ自体からは、現時点においての「全き答え」は得られないのである。

では、「過去」に依拠しつつ、「デザイン」を「全き答え」へと接近させることは、いかにして可能となるのか。先の引用部に続きバワの求めた方が、端的に示される。

一方で、この変容する生活の像の背景には、偉大なる恒常としての風土の存在がある。

これまでに見てきたような「変容する生活の像」と対比的に挙げられるのは、「恒常としての風土」である。変わり続ける「生活」に向けた「デザイン」は、その基底として恒常的に「存在」する「風土」

を「背景」に据えてこそ可能になるという、バワの制作論の根底とも受けとれる態度が、この言には示されている。端的に言えば、バワの言う「風土」とは、「過去」から見出された知見を現在において敷衍するための、不動の視座をもたらしものであると解釈できる。このような「風土」の概念を踏まえて先述の「デザイン」に関する記述を捉え直せば、バワのいう「デザイン」とは、「像」即ち単に浮動的な表層だけに追随するのではなく、その「背景」たる基底との関わり合いを自覚的に問うことによってこそ成立する行為として理解されるのである。

本節冒頭で示したように、過去への探求という態度を、第2章で言及した3つの「法則」が導かれた契機として捉えるならば、「第1の法則」と「第2の法則」との相関とは、この「生活」と「風土」との相補的な構造の自覚に裏付けられた関係であるとも言える。つまり、「第2の法則」において「文明」と「自然」とが重なり合うものとして捉えた「環境」を、ここで言う「風土」と読み替えるならば、そうした「風土」における普遍的な「生活」（「第2の法則」）と「過去」として呼び出される各時代の個別の「生活」（「第1の法則」）との相関が自覚されることによって、新たな「変容」に向けた「デザイン」が、「全き答え」へと接近し得るのだと言える。

3-2. 「合理的」であること——「生活」への応答として

ところで、前節に見た「生活」と「風土」の概念は、論考では「素材」の議論を介在させつつ展開されている。即ち、前節で示した通り、「生活」とその背景としての「風土」との相関が、第2章で言及した3つの「法則」における「第1の法則」と「第2の法則」との相関に重なり合うように、ここでかれが「素材」を巡って展開を試みる議論もまた、「もう一つの法則」を裏付ける事柄であると解することができる。即ち、前節で明らかにしたように「第1の法則」と「第2の法則」が建築家の視座についての「法則」であり、そのことが「風土」に根差した「生活」という相補的な構造に由来する一方で、ここで展開されるのは、「素材」への言及に関する「もう一つの」「技術的な法則」であり、そのことは建築家の実践的かつ具体的な議論に由来するものであると言える。こうした「もう一つの法則」に関わる議論は、無論、これまで見てきた諸概念と無関係に論じることとは不可能である。何故なら「素材」が、「過去」からの試行錯誤の結実として「風土」の中で育まれ、現代にもたらされていることは自明の事柄だからである^{注30)}。それ故、建築家の実践の側面についてのバワの言及もまた、前節で見た「過去」と「風土」なる概念が定義された後に、初めて可能となると解されるのである^{注31)}。

それでは、このような実践的な眼差しの先に具現化された「建物」にあっては、どのような資質が見出されているのであろうか。かれはこれを「合理性」と捉え、次のように述べている。

機能的 (functional) な建物というより、むしろ、それは根本的に合理的 (rational) な建物である。合理的であることは、機能 (function) と形態 (form) との双方に存在を与え、目的 (purpose) と同様に美 (beauty) を認める。

かれは、「建物」には「根本的に」、「機能的」に先行して「合理的」であることが求められると言い、さらにその「機能的」のみでなく、評価の水準として論じられる「機能」と「形態」、「目的」と「美」のそれぞれ対をなす形式のいずれにも、「合理性」は先行するものと

述べているのである。しかし一方で、こうした「合理性」の具体的な内容は、この引用部直前にて、セイロンの「ミーティングホール」の在り方として次のように例示される。

ミーティングホールにおける、独立柱によって支持された広く突き出た庇と、(傾斜のある：訳注)大屋根で構成された壁のない空間とは、生活の在り方への応答 (an answer to a way of life)である。この壮大な屋根は人々に影や庇護を与え、風の流れを開放し、そして美しい眺望を与えている。

ここでは、「ミーティングホール」の空間構成とは、「生活の在り方への応答」、即ち「風土」に依拠した普遍的な「生活」への答えとして、時代を超えて「合理的」に導かれた結果とされている。この「合理的」であること具体例にも、先の引用において2つの対として提示された水準の表れを見出すことができるのである。即ち「壮大な屋根」という「形態」は、人が集まるという「目的」の場所において、「影や庇護」や快適な「風の流れ」という「機能」や、「眺望」が有する「美」と同時に成立する、というような示され方である。しかし、この言においては「機能」「形態」「目的」「美」の諸水準には、先の引用で見たような2つの対構造は消滅しており、それらは、‘(カンマ)’と‘and’によって並置された、同時的で等価的な関係のもとで述べられている。これをバワの実践的見地に立脚した言であると捉えるならば、この等価性こそ、バワのこれらの水準に関する真意として理解することができる^{注32)}。従って、同引用文とは、その背景に想定された観念的なモダニズムに対する批判的な姿勢を示す言として位置付けることも可能となろう。何故ならこの引用とは、「形態は機能にしたがう」^{注33)} (L.H.サリバン)や、「実用的でないものはけっして美しくはなれない」(O.ワグナー)^{注34)}などの言葉が担わされた教条的な意味を、あえて相対化するような言であるとも解釈可能だからである。

このような観点に鑑みると、バワの言う「合理性」とは、第1章で言及したかれの言説の在り方がそうであったように、因果論的もしくは合目的な論理形式によって説明可能となるような、一般的な意味での「合理性」ではなく、むしろ、「美」や「喜び」という感性や感覚といった、いわば一見非合理的な概念をも包摂するような独自の「曖昧な」概念として、より広義に理解しなければならない。

4. 「建築家」の固有性に関わる問い

前章では、「風土」及び「合理性」の概念を「生活」との関わり合いにおいて読み解いた。このことは、論考Ⅰにおいてバワが「根本原理に関わる思想」と位置づけることから、いわば建築家の在り方に関わる一般的な問いであったと言える。では、そうした問いを、「建築家」というバワ自身の問題として個別化する時、かれ固有の方法的態度とは、いかなるものか。本章では前章までの考察とは異なる視点から、バワ自身の内的な固有性へと立ち入ってみたい。

4-1. 「建築家」の実存が自覚される「圏域」

まず、これまでの「根本原理に関わる思想」とは対比的に「ディテールに関わる思想」として述べられた次の言に注目したい。

(建築家にとって：訳注)残された手立てが発動されるのは、まさに、半ば感情的 (emotion) な、半ば思想的 (thought) なこの圏域 (this realm) に

おいてである。そしてこの地点においてこそ、建築家は芸術家になるのである、既知と既習の事柄とがもたらす比較的守られた安心感から踏み出して、直観 (intuition) やインスピレーション (inspiration)、適性 (talent)、才能 (gift) の世界へと移行 (step) することになるのである。そのような世界とは、かれの頭脳の内側であると同時にはるか外側であるような世界であり、殆ど、潜在意識的、あるいは超意識的 (sub-or super-conscious) な世界である。書き下してみると途方もないことのように思えるが、これこそが、未知なるファクターである。

「残された手立て」とは、「建築家」の立場を限定するものでありながら、それ故に、かれらにしか成し得ない究極的な特権を強調するものでもあろう。何故なら、引用部直前において「プロポジション」や「視線」といった具体的なデザインの問題として示されていた「ディテール」が、ここでは、専らデザインの主体である「建築家」の内的な働きに相關するものとして述べられているからである。このことから、バワがここで示す「ディテール」とは、建築的な細部と訳出可能なだけでなく、個別のデザインの淵源とともいう「建築家」の個性を絶えず伴うものとして、そのような細部にこそ表出される「個人の特徴」との訳語^{注35)}を充てることも可能だと言える。それ故、「建築家」の個性の介在なしには、普遍的な解答を「いかなる法則であろうと導くことはできない」と述べられていたのである。

また引用部について直ちに理解されるのは、「思想」と「感情」という2つの働きの区別である。「感情」とは「直観」「インスピレーション」「適性」「才能」などの働きとして例示されていることから、対比的に示される「思想」とは、理性や論理に関わる働きであると理解できよう。こうした「思想」と「感情」の意味をこれまでの考察に重ね合わせて解釈すれば、第2章で見た3つの「法則」は、この引用部における「既知と既習の事柄」として、即ち「思想」に相關する事柄として捉えることができる。故に、こうした事柄が有す説明可能性、再現可能性が「安心感」として述べられているのであろう。このような既知の世界「から (from)」, いわば「未知の」世界「へと (into)」 「移行」することが、ここでは「建築家」から「芸術家」への道筋として説かれているのである。ところで、「から」「へ」として、ある方向性を付与されつつ示される「移行」とは、一方向のみの運動を言い表しているのであろうか。ここで、「感情」の働きを「思想」の働きからの一方的な超越として理解するのは、平板な理解に過ぎるであろう。何故なら、到達点とされるべき世界は「かれの頭脳の内側であると同時に」はるか「外側」と言われ、さらにこのことが「潜在 (sub-) 意識」もしくは「超 (super-) 意識」と並列的に言い換えられているからである。即ち、その「内側」と「外側」、あるいは、「下位 (sub-)」と「上位 (super-)」との両者には、同質なものとしての連続性が見出されているのである。よってここには、もはや平板な図式上には描き得ない、「内側」と「外側」、あるいは、「下位」と「上位」との連環を可能にするような、論理的には一見矛盾するとも言える二重の方向性が見出されているのである。従ってかれの言の真意とは、「思想」と「感情」とが共に人間の内なるものであり、「同時」に外なるものであること、別言するならば、この「移行」の運動とは、「建築家」がいずれかの働きのみに偏向するのではなく、むしろ「感情」と「思想」との2つの対極的な作用の間で絶えず交差する運動である、と解し得るのではないだろうか^{注36)}。

それ故、「半ば感情的な、半ば思想的な」と述べるように、「感情」と「思想」との働きのいずれにも偏ることなく絶えず往還するという、いわば第3の心的作用の在り方を、バワは「この圏域」において自覚しているのである。

そこ（この圏域：訳注）には、建物には、生命が付与されるという、到達すべきこのような地点が存在する。まさにこの地点においてこそ、我々（建築家：訳注）の一人一人が、個別に、個人的な力を発動するのだと、私には思われる。…（中略）…建築家は殆ど無意識下において孤独であり、その瞬間、必然の運命のように決断を下さなければならない。

「建物」に「生命」が「付与」される「地点」において、「建築家」が自律的に「個別で、個人的な力を発動する」と述べられたこの言には、2つの事柄が示されていると理解できよう。

まず、「個別で、個人的な力」、即ち「建築家」の個性が発揮されるのは、他でもなく「この地点において」とされていること。「建築家」とは、「感情」と「思想」とが交差し、絶えず連関し合う「この圏域」にこそ実存し得るという、一人の「建築家」としてのバワの立場表明を、この言から読み取ることができる。先の「この圏域」に関する引用が「未知なるファクター」として未決定なままに開かれた様態として語られていたのは、「この圏域」が、いま・ここに生きる「建築家」の個性そのものに関わる問題であり、その圏域における実存のありようは、かれら「建築家」一人一人に委ねられているからであると理解することができる。

次に指摘できるのは、そうした「建築家」の在り方が、「建物」の「生命」と相関的に示されていることである。しかしそもそも「建物」に「生命」が「付与」されるとは、いかなる事態であろうか。これまでの考察において、「life」なる語は、常に人間の存在を伴って示されており、むしろその存在こそが「建築」にとって不可欠な資質となることが明らかとなった。そのことを前提に解釈すれば、「生命が付与される」とは、単に「建物」の物理的な形成を示す表現ではない。それは「建築家」がそれぞれ、「必然の運命」とまで自覚しつつ独自の方法によって「決断」を下すということ。つまり「この圏域」に依拠し、自らの立場を引き受ける「建築家」の決断によって、「建物」にいきいきとした「特徴」が付与されることなしには、バワが端的に言うように「建物は建築として達成し得ない」。それ故、その時「建築家」は、「殆ど無意識下において孤独であり」、かれらの決断は絶えず「個別に」「個人的」であると述べられるように、その唯一の個性が尊重されねばならないのである。

ところで先述したように、「建築家」の固有性に関わる問いが「未知なるファクター」として開かれたまま、途上の事柄として示されていることは、かれの関心の対象が、「建築家」によって具体化された個々のデザインではなく、むしろ「建築家」の在り方へと向かう思索の運動、或いは「建築家」が問うという態度それ自体にあることの表出として理解可能であろう。何故なら、バワが論考の表題として付した‘A WAY OF BUILDING’そのことの本質を明らかにする過程とは、「潜在意識」もしくは「超意識」という非現実的な問いに分け入ることで、むしろ現実を生きる「建築家」の存在の意味を逆説的に、或いは内省的に浮上させようとする、一つの哲学的態度として理解することも可能だからである。第1章において述べたよ

うに3つのテキストの表題が、‘A WAY OF BUILDING’から‘Ceylon : A philosophy for building’を経て、最終的に‘Statement by the Architect’へと変更された事実もまた、こうした解釈を裏付ける根拠として指摘することができるであろう。

4-2. 「喜び」によって開かれる「経験」の次元

では、バワの実存とは、いわば「建築家」以前としてのバワ個人の‘life’と如何に相関しているのか。かれが制作者である前に、一人の人間として建築を捉えたと思われる次の記述に着目したい。

私にとって建物とは、中を動きまわり（moving around）、空間の抑揚や印象を経験する（experience）ことによつてのみ、理解することができる。
[SA-18]

この言には、かれが「建築家」の立場を離れ、素朴な一人の人間として建物を身体的な動きを伴って「経験」し「理解する」過程が示されている。空間把握の可能性が、「建築家」としての観念的な理論によってではなく、具体的な「経験」によって見出されていることが解る。翻って「建築家」の見地からの言は、以下の通りである。

私は、建築を言葉で説明する（explain）ことは不可能だという強い確信を持っている。…（中略）…建築とは、完全には説明し得るものではない。それは、経験し得るものだ。[SA-18]

ここには、とりわけ近代以降の建築家に求められてきた、建築の言葉による論理的な「説明」の限界が、部分否定の表現を伴いつつ「強い確信」として言明されている。ここでもやはり、論理のみに収束することのない「経験」の可能性が、期待されているのである。

上述の2つの引用には、「経験」即ち「動く」という身体を伴う人間の行為が共通して論じられている。ここには、建築家と住まい手という形式的な区分を超えて両者を同一視する次元を見出そうとするバワの意図を読み取ることができる。このことは、第4章冒頭において引用した論考Ⅰでの記述「建築家は芸術家になり」が、論考Ⅱにおける文脈から削除された事実とも符合すると言える。この変容とは、「建築家」も住まい手も「芸術家」も、「経験」の次元においては共に一人の人間として立場を同じくすることの自覚の表れとして捉えることができるだろう。このことによって、前節において近称の指示語を伴いつつ示された「この圏域」が、ここではもはや「建築家」のみに限定される事柄ではなく、異なる立場に通底する一つの地盤という、新たな意味を獲得していることを指摘できる。

このように見ると、前節で明らかにした「生命」とは、もはや「建築家」という限定的な立場からのみ見出されるものではない。むしろ、第1章での引用の中で住まい手を「建物に生命を吹き込む人々である」と示していたように、かれは「生命」を、異なる立場を超えた包括的な次元から見出しているのである。端的に言えば、「建物に付与される」ものとしての‘life’とは、その建築に関わる全ての人々によって生かされ生きられた「生命」の働きそのものとして理解し得るのである。さらに、このことと第3章までに見た「生活」の語義としての‘life’を併せて解釈するとき、こうした多義的な‘life’が、「経験」の次元において重層化されていることが明らかとなる。

では、このような‘life’と共に感得されるのは、どのような人間

の情態なのであろうか。かれは次のように述べる。

喜び (enjoyment, pleasure) ^{注37)} の可能性に達することは、快適性や機能的な使途に加えて、とても必要なことである。[SA-18]

ここでは、「喜び」なる情態は、「達する」という表現を伴うことによって、一つの極致であることが示唆されている。これまでに見た‘life’の多義性は、この「喜び」という情態によって、「経験」の次元において一元的に束ねられていると言えるのである。このことは、第一章で引用した「エナ・デ・シルバ邸」において施主と分かち合ったという「喜び」と、派生語を伴って多用される‘life’との重なり合いにも符合する。このことに鑑みると、「喜び」という情態こそ、バワにとって「経験」の次元を開き、発動させる初発的な契機であるとも言うことができよう。この時、「建築家」と住み手との共鳴は、建築を通して一つにして広大な制作者の世界、即ち、「喜び」の地平に開かれているのである。

結

これまでの考察において、バワのスリランカを拠点とした多岐にわたる活動の源泉には、多様な相として見出される‘life’への関心があることが明らかとなった。バワの言う‘life’には、「生活」と「生命」の2つの意味が含まれていた。

先ず「生活」とは、3つの「法則」の解釈（第2章）を通して考察したように、「過去」として呼び出される各々の時代の個別の「生活」としての側面と、「文明」と「自然」とが重なり合うものとしての「風土」に根差した普遍的な「生活」としての側面との2つの側面において捉えられており、この2つの相補的構造の自覚によって、「変容する社会」においてもなお、デザインの可能性が残され得ることが述べられていた（第3章1節）。このことが「建築家」の視座として見出される時、「合理」の概念のもとに、「生活」への「応答」としてあるべき「建築家」の実践的な側面が有意なものとなるのであった。（第3章2節）。

一方で、「生命」とは、顕在化されたものとしての「生活」に向けた眼差しが、いま・ここに生きる「建築家」によって獲得される時、「生活」の潜在的な基底として捉えられていた（第4章1節）。このような「生活」から「生命」への遡行的連関を可能にする作用が、バワの言う「経験」の真意であり、それは「人間的な」情態としての「喜び」によって発動される次元なのであった（第4章2節）。そして「経験」の次元とは、‘life’が有する多義性、重層性によって織りなされる次元であり、これが人間の「生活」及び「生命」を包括する基盤として見定められることによって初めて、普遍的な「建築」はまさに具現化し得るのであった。それ故、バワもその次元に生きることを自覚した「建築家」として、過去と現在、西洋と東洋、伝統と革新等の多様な対概念の重合をも包含したと言えるのである。

本稿で探求した問いは、以下に示す別の対談録の一節にこう約言されている。

何かを創造すること… その世界 (that world) を想起させること。それは、その世界そのものを再創造することとは異なる。——何故なら、それはその世界とは異なる世界であるからである。——その世界と結びつくこと…

人々が、彼らなりに喜びを見出すことを例外としては、それは、どんな社会的構造にも拘束されていない。それは、私自身が経験した生活と異なるものではない。[BB-40]

ここで言われる「その世界」には、言外に「この世界」なるものが想定されていると考えられる。「この世界」を、建築家の生きる「この圏域」（第4章1節）であると捉えるならば、これとは「異なる世界」と言われる「その世界」とは、建築家に限定された立場を超える人々が「生活」し「生き」る「圏域」であると解される。この言には、建築家にとっての「この世界」が、「その世界」を想起させ、分かちがたく「結びつく」局面についての記述がなされていると言えるのである。このことは、‘life’（生命/生活）が織りなす「経験」の次元という「圏域」における、建築家と人々との同一視（第4章2節）に重ねて理解することができるだろう。そして、その「結びつき」は、職能的な義務や「拘束」として強いられるものではなく、むしろ自由で自発的な「喜び」という情態によって開かれた、人々が「世界」の違いを超えて普遍的に備えている、いわば馴染み深く「異なるものではない」感覚によるものである。

とりわけ「何かを創造すること…」という冒頭句の「…」には、もはや「創造」すべきものが「何」であるのかは問いではなく、むしろ「創造すること」それ自体を主題化し、まさにそのことが生れ出る局面を見定めようとするバワの意図を、慎重に言葉を模索しようとする態度と共に読み取ることができる。即ち、建築とは何か、建築家の在り方とは何かというような、制作における根源的な問いが、言葉によって反省的に、建築のはじまりへと遡行する問いとして語られているのである。このように、バワが論理的「説明」の限界を見取ったという言葉の可能性の極限的な位相においては、かれの思想全体を発動させる問いとして、建築のはじまりへの問いが、原初的に企てられていたと言えよう。

本稿は、第1章で述べた通り、‘life’の概念を一つの軸として、バワの建築思想における諸概念の構造を解説することを主な目的とした。しかし、本稿において言及したようなバワの推敲の軌跡が示唆するかれの思索の深化の過程そのものについては、さらなる論究を加える必要があるだろう。故に、こうした変容の詳細について、作品の生成過程の分析と合わせて解明することを、本研究における今後の課題としたい。

注

本稿に引用したジェフリー・バワに関する資料、及び、言説は下記に示す資料に基づく。本稿では略号の後にハイフンにて引用部ページ番号を示す。ただし原文にページ番号表記のない[WB]については、引用論考の冒頭ページを1とした通し番号による表記とし、[WB-2]については、その表記を省略する。

[CW] Robson, D.: Geoffrey Bawa the Complete Works, T&H, 2002, revised 2004

[WB] Bawa G.: A WAY OF BUILDING, Times of Ceylon Annual, Times of Ceylon, pp.1-17, 1968

[PB] Bawa G.: Ceylon : A philosophy for building, Architects' Journal, pp.939-940, 1969

[SA] Bawa G.: Statement by the Architect, Taylor, B., Geoffrey Bawa, Concept Media, pp.16-18, 1986

[BB] Daswatte, C.: Bawa on Bawa, Meng, T. K.: Asian Architects 2, Select Publishing, pp.38-65, 2001

※言説の訳出、引用文中の下線はすべて筆者による。

※〇〇：訳注、…（〇略）…、はそれぞれ筆者による内容補足、省略を示す。

- 注1) スリランカ (Sri Lanka) は、1948 年に英連邦内の自治領「セイロン」として独立した。1972 年に共和制に移行し、正式名称を「スリランカ民主社会主義共和国」と改称した (鈴木正崇：スリランカの宗教と社会——文化人類学的考察，春秋社，p.25, 1996 年)。バワは、国名改称後も「セイロン」の国名を好んで使用したとされる [CW-13] が、本稿においては、引用部を除いて、「スリランカ」の表記に統一する。
- 注2) D.ロブソン：アガ・カーン建築賞審査委員長賞：ジェフリー・バワの生涯の全作品，a+u, No.377, p.116-117, 2002 年。その他に、1948 年生まれのマレーシア人建築家の K.ヤング，(Yeang, K.) は、バワから一世代後の立場として、「多くのアジア人建築家にとって、ジェフリー・バワは我々の心と精神にとって特別の存在である。彼は我々の最初の英雄であり、導師である。」と述べている (Robson, D.: *Genius of the place*, Frampton, K., Correa, C., Robson, D., *Modernity and Community: Architecture in the Islamic World*, T&H, p.18, 2001)。また、国明 (Meng, T.K.) は “Asian Architects 2” (前掲書) において、バワの作品を、「ポストコロニアルの土壌に根差したアジアらしさの具現」と評価し、後続のアジア人建築家への影響について述べている。
- 注3) スリランカは 4 世紀に亘り西欧諸国による植民地支配下にあった。建築様式は、各時代の新たな宗主国から持ち込まれた要素と、地元職人によって時代を超えて持ち越された要素とが融合し発展していった。
- 注4) バワは 1938 年よりケンブリッジ大学にて文学を、後に法律を専攻し法律家としての資格を得る。1954 年より AA スクールにて学ぶ。当時の教員陣には、J.キリック, P.スミッソン, A.コーン等が見られる。当時、ミース派とル・コルビュジェ派とに分化された学内は、国際主義的モダニズムの潮流のただ中にあった。しかしバワは、いずれの派にも属することなく、L.B.アルベルティやG.ヴィニョーラやA.パラディオなどのイタリア古典へと傾倒していった。1957 年 38 歳にて、建築家としての資格を得る。([CW-15-25] による)
- 注5) *grand tour* : もと英国貴族の子弟が教育の仕上げに行った旅行 (『ランダムハウス英和大辞典第 2 版』, 小学館, 1994 年, p.1158)。貴族階級のカントリーハウスやパラボディオのヴィラ訪問という経験が、後のバワの作品に影響を及ぼし続けたと言われている。拠点をコロombo に移した 1957 年以降も、バワは生涯にわたり世界中への旅を続けた。
- 注6) [CW-261]
- 注7) ‘Genius of the place’, 前掲書, p.18
- 注8) バワの建築作品を主題とした文献として、かれの作品におけるヴァナキュラーな側面を強調した [SA], 及びバワの評伝である [CW] が挙げられる。我が国における文献として、バワの自邸と庭園の作品集 “Geoffrey Bawa Residential Masterpieces 07” (二川幸夫編, A.D.A.EDITA Tokyo, 2010) がある。その他にバワを歴史的、地理的な位置づけのもとで紹介した文献としては本文に言及したもの他に、カーティスによる『近代建築の系譜』(五島朋子他訳, 鹿島出版会, 1990) が挙げられ、その中でかれはバワの建築作品における「気候や植生, 手工業技術, 伝統建築との調和」(pp.676-678) を特筆する。なお、地域主義に関するバワ自身の発言として「私は地域主義について、それは、その地の要求を考慮すると、そこから自然に起りえるものであると考え始めた。… (中略) …私は地域的なものを創ろうとしているのでも、地域主義を信条としているのでもない。」[CW-262] が挙げられる。我が国における先行研究の一つとして、バワの生涯と作品を紹介した「アジア近現代建築思潮その 13 スリランカの建築家, ジェフリー・バワとその作品」(桑原善宣他, 日本建築学会関東支部研究報告書, pp.425-428, 2004) がある。
- 注9) スリランカは 1948 年に独立後、急速なグローバル化と都市化を進めた。バワは、常に政治的中立の立場をとりながらも、多くの独立期の建築家と同様に当時活躍した政治家らと近い関係にあったとされる [CW-109]。従って、内戦の続く混乱した社会情勢の中で、国会議事堂や大学等の国家プロジェクトの設計活動を行っていたバワを、国家の成熟と共に歩んだ建築家として位置付けることができよう。
- 注10) [CW-262]
- 注11) バワは、フランス系イギリス人とムスリムの子孫である父親と、シンハラ人とオランダ系入植者の子孫であるバーガーの母親のもとに生まれ、上流階級に育った。民族の綾織りの中に生を受けながらも、バワは、単にセイロン人と呼ばれることを好んだとされる [CW-13,15-25]。
- 注12) バワとロブソンとの親交や出版の経緯に関しては、[CW] の序文に詳述されている。
- 注13) Robson, D. 1970 年からコロombo 大学で教鞭を執り、バワに出会う。1979 年から 1983 年、スリランカ政府主導の「10 万戸プロジェクト」にアドバイザーとして参画し、スリランカに滞在する。[CW] の他、モンスーンアジア地域におけるバワの影響と後続の建築家に関する “Beyond Bawa Modern Masterworks of Monsoon Asia”, (T&H, 2002) が主著として挙げられる。
- 注14) Frampton, K. フランプトンは、バワと同時期に AA スクールにて学ぶ。主著は本稿で引用した『現代建築史』(中村敏男訳, 青土社, 2006)。
- 注15) [CW-262]
- 注16) 「第 2 版へのまえがき」, 『現代建築史』, p.12, 前掲書
- 注17) Meng, T. K.: *Asian Architects 2*, pp.12-13, 前掲書
- 注18) コロombo に拠点を置く新聞社 ‘Times of Ceylon’ 発行の年刊芸術誌。
- 注19) [CW-60]。同書によると、バワの専門雑誌への初出は、協働者 U.プレスナー (Plesner, U.) との共著による ‘Ceylon—Seven New Buildings’ (Architectural Review, London, 1966) である。本誌では、地域主義的な特色は控えられ、モダニストとしての側面が強調された。
- 注20) C.ボン, D.サンソーニとの共著による自身の庭園「ルヌガंगा」の作品集 ‘Lunuganga’ に、バワは巻頭言として ‘A Garden in a larger garden’ (Singapore Times Edition, pp.9-13, 1990) を寄せている。
- 注21) [CW-141]
- 注22) [CW-261]
- 注23) [CW-141]
- 注24) 本作品の初出の際には、‘HOUSE AT COLOMBO’ ([PB-131] として掲載されているが、本稿におけるバワの作品名称については、ジェフリー・バワ財団アーカイブの作品リストに従うものとする。
- 注25) [CW-75]。設計当時、‘meda midula’ と呼ばれる中庭を採用した都市住宅の概念は、スリランカでは既に忘れられた伝統形式であった。バワは、コロombo の急速な都市化への対策の一つとしてこの形式を取り入れ、以降の作品においてその展開を試みた。
- 注26) バワのこの気質については、[BB-38] や ‘Genius of the place’ (p.18, 前掲書) 等、バワを直接知る多くの著者の論評に記されている。
- 注27) このことは、「熱帯諸島において建築は、建物の在り方に基づかなければならない。それは、島そのものと、人々そのものに由来するものである。」(“Asian Architects 2”, p.43, 前掲書) における「環境」なる語に、「島そのもの」としての「自然」と「人々そのもの」としての「文明」の 2 つの意味が含まれていることと、一致する。
- 注28) 論考Ⅱでは過去の事例として、中世イタリア都市、英国式庭園、アルハンブラ宮殿、ロンシャンの礼拝堂、ムガル帝国の要塞等が加えられており、かれの視野の更なる広がりが示されていると言える。
- 注29) Anuradhapur : アヌラダプラ期 (前 2 世紀頃～1017) におけるスリランカの首都、古代シンハラ文明の中心地 (『ブリタニカ国際大百科事典 1』, ブリタニカ, p.144, 1993)。時代区分は、杉本良男『もっと知りたいスリランカ』(弘文堂, 1987) に拠る。バワの平面計画には、この時期の修道院からの引用が見られるとの指摘もある [CW-263]。
- 注30) このことは、同論考中に「シンハラタイル」という建材を例として、その伝来、及び継承の過程について詳述していることも重なり合う。
- 注31) このことは、第 2 章で見た 3 つの「法則」のうち「もう一つの法則」が、「第 1 の法則」「第 2 の法則」について言及された後に、それらとは異なる位相のもとで述べられていたことと論理的構造が一致する。
- 注32) 引用部において示される「美」という水準は、論考Ⅱにおいて「美と喜び (pleasure)」と言い換えられており、「喜び」が前出の 4 つの諸価値に加えて新たに自覚され、同様に等価に扱われていることが示されている。なお、「喜び」については第 4 章に詳述する。
- 注33) 鈴木博之他, 『新建築学大系 5 近代・現代建築史』, 彰国社, p.135, 1993
- 注34) 鈴木他, p.84, 上掲書
- 注35) detail : 細部, 詳細, 個人の特徴, (絵画・彫刻・建築などの) 細部 (『ジーニアス英和大辞典』, 大修館書店, p.600, 2001)。
- 注36) 晩年の講演において「観念的なスケッチとして結実される (設計の：訳注) 初期段階には、多くの思想と感情とがある。そして、最終形としてのわたしの作品は、このスケッチを含むものであることに気づく」(Bawa G., ‘My Architecture’, “ARCASIA FORUM—4”, p.32, 1987) と述べられるように、ここにもまた、「建築」にとって不可欠な資質としての「思想」と「感情」とが相即する関わり合いが見出されている。
- 注37) pleasure : 「喜び, 楽しみ」の一般的な語, enjoyment : 満ち足りた静かな喜び, 楽しみ (『ランダムハウス 第 2 版』, 小学館, p.2078, 1993) とされることより、本稿においては、共に「喜び」と訳出する。

(2010 年 9 月 8 日原稿受理, 2011 年 1 月 20 日採用決定)